

A vertical poster for a film. The background is a misty forest with a person walking away from the viewer on a path. In the foreground, a wolf is looking down. The title is written in large Japanese characters: '妻が' in yellow and '消えた' in red. The director's name '山中與隆' is on the left, and 'YAMANAKA TOMOTAKA' is written vertically next to it. At the bottom, 'Duo-Yamanka' is written in red.

妻が

消えた

山中與隆

YAMANAKA TOMOTAKA

Duo-Yamanka

妻が消えた

山中與隆

目次

妻が消えた 1

一 妻が消えた日 1

二 搜索 34

三 白い獣(けだもの) 60

四	白骨死体	89
五	意外な場所で	97
六	諦め	182
七	妻の帰宅	195
八	妻が話したこと	209
九	その後	225
編者あとがき		248

妻が消えた

一 妻が消えた日

梅雨の雲がどんよりと垂れ込めた夕方、一日中パソコン仕事をしていた妻が、

作 山中與隆

「運動不足で気持ちが悪くから少し歩いてくる。一緒に行かない」

と、机を並べてパソコンに向かっている私に言った。

「雨降ってるんじゃない。僕は、ちよつと途中だから・・・」

私はパソコンに向かったまま中途半端な返事をした。妻は外のようにすを確かめていたが、

「いま降ってないみたいよ、どうする」

とまた聞く。

「もうすぐ暗くなるんじゃない・・・」

あいかかわらず私は気乗りしない返事をした。

「じゃあ、わたしちよつと家の前を歩いてくる」

そう言って部屋を出て行った。しばらく玄関でござごそしていたが、やがて戸が閉まる音がした。

私は仕事を続けた。私たちのパソコン仕事というのはたいした稼ぎにはならないが、一応小説を書い

ている。妻はロシア語の翻訳をしている。妻の稼ぎも知れたものではあるが、私よりはかなりましである。我が家は、その二人分を合わせて何とか生計を立てているといったところである。

二人とも在宅の仕事なので、運動不足解消のために歩くことを日課にしようかと話し合っているが、締め切りなどのために運動の日課が実行されることは、むしろ少ないくらいだ。

妻が出かけてから三十分くらいしたとき、私はトイレに立った。ついでに家の前に出てみた。妻が歩いているようすをちよつと見ようと思ったのだ。家の前の道は町道で、緩やかな坂になっている。上に行くくと数軒の家が田畑の中に散在したなかを百メートルくらいまっすぐ進み、直角に右に曲がる。曲がった道はさらに民家や墓地、林の側を通つて、やがては広い工業団地にでる。工業団地内には広い自動

車道路がついていて、その先には国道がある。

下りの方は同じように民家が散在しているが、こちらの方がやや家の数が多い。道は坂を下りながら緩やかに右に曲がっていく。私が家の前に出たとき妻は下りの方を歩いていて、すぐに右に曲がりながら見えなくなつた。妻が家の前を歩くというときは、いつも一定の区間を往ったり来たりする。妻は何回目かの下りを歩いているところなのだろう。私は部

屋に戻ってまたパソコンに向かった。

しばらくして窓の外を見ると、曇った空はさらに薄暗くなっていた。結構遅くまでがんばって歩いて
いるなと思ったが、もうすぐ帰ってくるだろうと思
いながら、そのまま仕事を続けた。さらに三十分く
らい経ったろうか、妻はまだ帰ってこない。空は少
し明るさを残しているが、周りの木や家は細かい部
分が見分けられないくらい暗くなっている。私は少

し気になつたので、外に出てみた。

坂の上の方にも下の方にも妻の姿はない。いまちようど見えない部分を歩いて、やがて折り返してくるものと思い、私はそのまま家の前に立って、坂の上と下を交互に見ていた。

五分くらい見ていただろうか、どちら側からも妻は姿を現さない。私は少し心配になつてきた。私は玄関の棚に置いてある大きな懐中電灯を持って、と

りあえず下の方に行つて見ることにした。下の方に歩いていく妻の姿を見たのは三十分以上前だから、妻が下の方にいるとは限らないのだが、その方角のどこかで妻に何かがあつて動けなくなつているような気がしたのだ。気がしたというより、そうに違いないと思えた。

この道の片側には幅一メートル、深さ一メートル半くらいの水路がある。水路は両側と底がコンクリ

ートで固められていて、底のほうをかなりの速度で水が流れている。水深は人のくるぶしくらいだろうが、水路の底は滑りやすくなっているだろう。私は妻が転んだかどうかして、その弾みで水路に落ちたのではないかと思えてきた。水路は途中で道から左のほうに離れて茂みの中を通っている。私はとりあえず三百メートルくらい先の国道までそのまま道路を行ってみることにした。

国道に出るまでの道の途中には何も変わったことはなかった。国道は、田舎とはいえかなりの交通量があり、ヘッドライトが両方向から切れ目なく続いている。夕方の比較的交通量の多い時間帯なのだ。妻は、ウォーキングのときに国道に出ることはない。国道に出るまでのどこかで折り返していたはずだ。私と一緒に歩くときもそうしていたから間違いないと思う。

私は水路が道から離れていく場所まで戻った。水路の進む方向に道路はなかったが、コンクリートで固められた水路のふちが幅三十センチくらいあって、歩けるようになっていた。私は伸びてきている雑草のつるを踏んだり跨いだりして、水路の中を懐中電灯で照らしながら進んだ。三十メートルくらい進んだところで水路は暗渠になっていた。私はしやがみこんで、その入り口から懐中電灯を奥に向けて照ら

したが、その弱い光はすぐ近くで吸収されたように、水の底も水路の先のほうも見ることが出来ない。

私は、暗渠が再び開渠になるところがあるはずだと考えた。立ち上がって水路の方向や、道路がどうなっているのか見渡した。このあたりはここ二、三年の間に圃場整備が進み新たな農道も整備されている。いつも通りなれた道以外にも新しい道が出来ている。私は元の道に戻って、暗渠のあたりを見失し

なわなないようにしながら迂回する道路を探した。いつの間にか細かい雨が降り出していた。あたりは真つ暗になつていて、所々にぽつんとある街灯が頼りになる。

「どうされたのですか」

いきなり声を掛けられたのでびっくりした。よくみるとここから三軒下の大きな家のご主人であつた。以前自治会長をしていた吉田さんである。

「いや、家内が運動がてらこの辺を散歩すると言つてから帰つてこないもので・・・」

「奥さん、元気に歩いていましたよ」

「見かけたのですか」

「ええ、薄暗くなるまでがんばってるなと思ひましたから」

「それは、いつごろですか」

「さあ、もう薄暗かったからそんなに前じゃないで

すよ。いまごろお家に帰っているんじゃないですか」
吉田さんはそう言うが、そんなはずはない。私がこ
の道を下つて来たのに出会わなかつたのだから。し
かし私は、家を飛び出したとき、勝手に妻が下の方
にいますかと思ひ込んだことを思い出した。確かに帰つ
ているという可能性もある。だがその前に、このあ
たりに住んでいる吉田さんに聞いておきたいことが
あつた。

「この水路はあすこで暗渠になっているけど、また開渠になるのはどこですか」

吉田さんはおかしなことを聞くとというような顔で、

「それはすぐこの先ですけど」

と指差したのは、すぐ下の家の向こう側くらいのところだった。その下の家の横には、吉田さんが示した開渠になったあたりに行く道もついているようだ。私が礼を言つてそちらに向かおうとすると吉田さん

が、

「奥さん、水路にでもはまったのですかね」
とさつきより少し緊張した声で聞き返した。

「いや、それはわかりませんが、ぜんぜん姿が見えなくなっているもんで・・・」

「それは大変だ。山田さんは一度家に戻られて、奥さんが帰っていないかどうか確かめてくださいよ。
私は近所の者を呼んで水路なんかを見てみますか

ら

「すみません。おねがいします」

私はそう言つて、小走りに家に向かつた。ふだん運動をしていないせいで上り坂は、すぐに息が切れ、十メートルも走ることは出来ず、そのあとは早足で歩くのが精一杯だった。つつかけと、いつの間にかなかつた。慌てているためもあつて、何度もつつかけが脱げそうになつた。

私は家に鍵をかけずに出ていたが、妻は帰って
なかつた。私は長靴に履き替え、傘を持ち、家に
かけて先ほど吉田さんと出会つたあたりに向か
た。が、すぐに思い直して家に引き返すと、家の
鍵をあけた。私がいないうちに妻が帰つてきたら
と思つたからだ。妻が散歩に出かけるとき私が
家にいたのだから、鍵を持つて出てはいないはず
である。

私が、水路が道から離れていくあたりに戻つたと

き、そこには吉田さんも誰もいなかったが、水路が再び開渠になると教えてくれたあたりで人の声が聞こえる。見ると懐中電灯の光が動いている。私はすぐ下の家の角を曲がってそちらに向かった。近づいていくと、三人の人影が街灯にシルエットとなつて見える。私の懐中電灯の光に気付いたのか、その中の一人が私の方に歩いてきた。吉田さんだ。

「家にはいなかったのだね。あすこのところで水路

のトンネルは終わってるんだが、中のほうにも、少し入ってみたけど奥さんいなかったよ」

見ると、吉田さんは長靴をはいている。さつき会ったときもそうだったのか覚えがない。

少なくとも暗渠の部分に妻が倒れていないと聞いて少しほっとした。しかし、それならばどこにいるのだろうか。

「二人ほど来てくれているから、一緒に水路をもう

少し見てみましよう」

吉田さんはそういつて先に立って歩き出した。私は、暗くなり始めた中を一人で探したときよりはずっと心強い。

「子供なら川まで行くかも知れんが、大人はそうは流れんだらう。曲がりもあるしな」
誰かが言った。

「だけど、雨で水かさが増したら、あれでもわから

んよ」

「もし山田さんの奥さんが水路に落ちたのだつたら
だが、落ちたとは限らんのだからね。それに、まだ
明るい時間に歩いておられたんじやけ、めつたに落
ちるもんじやないでよ」

「そうよのう」

私たち四人は水路の中や周辺をめいめいの懐中電
灯で照らしながら水路沿いの道を下つていった。水

路は急に幅を狭めて車の通る広めの道路の両側に分かれる形となつて、国道に下りる急な下りとなつてゐる道路の両脇を流れ落ちてゐる。さつき私が国道に出たのとは違ふ場所である。道の両側に分かれた水路の幅は狭い。

「大人はここでひっかかるじやろ」

誰かの言葉に、私は水路の中に下りてしやがんでみた。尻がつかえてしやがむことが出来ない。

「奥さん、そんなに細かい人じゃなかつたし・・・」
これ以上水路を流された可能性はなさそうだという
状況だったので冗談も飛び出した。それでも一応川
まで行ってみることになった。

国道に出たところで、水路は国道に沿うように五
十メートルほどいったところで、滝つぼに落ちるよ
うに川に流れ落ちている。その川幅は十メートルほ
どで、水路の水が落ち込んでいる場所は、川底がコ

ンクリートになっている。しかしその先のほうは、草の茂った川底となっていて、そこに架かっている橋は、時期になると私が妻と螢を見る場所である。

川の水量はもちろん水路より多いが、川幅があるので流れは緩やかである。もつともこの川も大雨の時には濁流が流れ、人を飲み込むほどになるが、いまは穏やかに流れている。

橋の上で四人は立ち止まった。

「水路でなかつたら、奥さんどこなんじやろ」

「どこを歩きなさつとつたんかね」

「吉田さんの少し上のへんと、私の家より上の岩本さんの石垣のところくらいを往復していたと思うんですけど」

「上はもう見たの？」

「いや、まだです」

「皆さんありがとう。もう解散にしましょう。わし

は山田さんと一回上を見てきますけえ」
と吉田さんが協力してくれた二人に言った。私も他の二人に礼を言った。

吉田さんと私は国道を歩いて、最初に私が国道に出たところから、坂道を登ってみることにした。吉田さんにも帰ってもらって、私一人で上の方を確かめようかとも思ったが、あまりにも心細かったので、吉田さんの好意には甘えることにした。吉田さんと

私は真つ暗くなつた道のあちこちを懐中電灯で照らしながら、坂道を上がっていった。

「それにしても、どういふことかね」

吉田さんが言う。

「わかりません。私も家内が歩いているところを、一度家の前に出て見たんですよ。そのときは吉田さんの方に向かっている家内のうしろ姿を見て『やつてるな』と思つてすぐ家に入つたんです。それから

三十分くらいして、暗くなり始めたのに帰ってこないので見に来たのです。それで吉田さんに出会ったというわけです」

我が家の前を通るときには、帰っていないかを、吉田さんも一緒に確かめたがいなかった。

結局、坂の上の方も、妻が折り返したと思われるところより少し先まで見たが何もなかった。吉田さんはもう少し待ってみて帰ってこないようだったら駐

在に電話して、探してもらおうように頼むといい、と言い残して帰っていった。

私は、一人で家に入ったが、何をしたらいいのか頭が働かない。

妻が、国道の少し先にある小さなスーパーに、何か思いついて買いに行ったとしても、もうとうに帰ってきていい時間である。妻が財布をもつて出たかどうか、私はそれを探してみた。いつも置いてありそ

うなところには見つからなかった。妻は何につけ置き場所が定まらないでしよっちゆう探しているから、私にも見つけずらい。

八時前になったころ私は、とりあえず駐在に電話することにした。この地域の駐在は良く肥えた愛想のいい人だ。電話にはすぐ出た。事情を話すと、これから話を聞きに来てくれるという。

十分くらいしてチャイムが鳴った。玄関を開ける

と太った駐在が愛想よく立っていた。

二 搜索

私は玄関先で、夕方以降のことを説明した。駐在は妻が持ち出したものは何か、逆に出かけるときに持ち出しそうなもので、持ち出していないものは何

か、普段と変わったようすはなかつたかなどを聞いた。そして、それらのことを直ぐその場で調べるように私に命じるように言った。

「とりあえず搜索願を出しましょうね」

と言うので、私は失踪というより事故でその辺に倒れているかもしれないので、それをまず探して欲しいと繰り返した。それに対して駐在は、

「それはしますが、一応届けは出してください。そ

のほうがわれわれも動きやすいですから」

私は駐在が差し出した用紙に、妻の住所、氏名、年令、容姿の特長、出て行つたときの服装などを書きこんだ。駐在はさらに、

「ちよつと聞きにくいことですが、奥さんが家出をするようなことは何か思いあたりませんか。たとえば夫婦喧嘩とか……」

「夫婦喧嘩ならしよつちゆうですが、家出するほど

とは思いませんが」

「では奥さんは、最近徘徊などはなかつたですか」
私は、妻に認知症のけはいがまつたくないことを強調した。

「皆さん、たいていそのように言われるんですよね」
駐在は、私が書き込んだ『搜索願』に目を通すと、
まだ書き足りないことがあると言つて、用紙を私の
前に置き直した。印鑑、キヤツシユカード、現金、

携帯電話等々・・・わかることはすべて書けというのだ。通帳やキャッシュカードの類は、普段すべて家内が扱っていたので、私はそのありかさえすぐにわからなかった。私がごそごそあちこちの引き出しやたんすを探していたら、駐在はわかってからでいいから探しておくように言った。そして現金が引き出されていないかなどもすぐに調べるように言われた。

とにかくのんびりここで議論している場合ではないので、私は気が気でなかった。こうしている間にも妻が取り返しのつかないことになってしまっているのではないかという強迫観念のようなものを感じていた。「とにかく早く搜索を始めてください。いまは一刻を争うときですから」

私はかなり強い調子でいった。

「では、私は一旦駐在所に戻って、本署に連絡を入

れて応援を頼むなどしてから搜索を始めることになり
ます」

「今晚中に始まるのですか」

「出来るだけそうしますが、先ほどのお話だと、奥
さんが歩かれていたあたりは近所の方と一通り調べ
られたそうなので、あとは雲をつかむような話で、
時間がかかるかもしれませんが。一応そのことは理
解しておいてください」

そう言い残して駐在は白と黒の軽四輪で帰っていった。

そのあとすぐに駐在か警察から連絡があるのだと思つて、私はまんじりともせず電話の側で待つていた。一時間くらいたつたころ玄関のチャイムがなつた。私は、さっきの駐在が搜索の応援を連れてきたのだと思つて、玄関に飛んで出た。小柄でプリプリした向かいの児島さんの奥さんだった。普段は人

懐こい笑顔を絶やさない人だが、今日は心配そうな表情で、妻がいなくなつたことを人づてに聞いて、心配して来てくれたのだ。事情を説明すると、兎島さんの奥さんは出来ることがあつたら何でもしますからと言つて帰つていった。

駐在からは十時になつても何の連絡もない。私は少し空腹を感じたので、冷蔵庫をあさつて、古いアンパンやチーズを食べ、妻が沸かしておいた麦茶を

飲んだ。

十一時前に駐在から電話が入った。それによると、本署に連絡したので捜索に取り掛かる旨と、私のほうでも知り合いなど心当たりには問い合わせるように、とにかくどんな小さな情報でも集めて駐在に知らせて欲しいとのことであった。そして捜索は明日になるとも言った。私は、それでは困ると主張したが受け入れられなかった。

親戚や知り合いなどへの電話と言われても、広島には寝たきりの叔父を介護している伯母がいるくらいで、私たちにはこういうときに頼るような子供はいない。知り合いはいるが、もう十一時も過ぎていたのであす朝することにした。万一妻がそのような人の家に行ったりしていたら、そちらから連絡が入るだろうとも思った。

私も真つ暗な夜中に、さつき見たようなところを

もう一度見てもどうにもならないと思つたが、このままでは気がすまないので、長靴を履き、ジャンバ―を着て、傘と懐中電灯を持って出かけた。上の方も下の方も一通り歩いてみたが、妻も妻の痕跡も何一つなかつた。細かい雨が降り続く中、私は途方にくれた気持ちで力なく家に帰つた。明日の朝明るくなつたらもう一度このあたりを探してみることにしようと思つた。しかしその場合、仮にそれで見つか

つても妻は生きていないかもしれない。私は明日以降に備えて一応床についた。もちろん寝付かれず、さまざまな可能性が頭をよぎっては消えた。いつの間にかうつらうつらしたが、夢もたくさん見た。

国道をとぼとぼ歩いている妻の後ろ姿が見える。ダンプがその横を通り抜ける。ダンプの大きな車輪が巻き上げる水しぶきが妻に降りかかるようすが、後続の車のヘッドライトに照らされて見事なまでに

よく見える。私は後ろから妻に追いつこうとするが、足が前に進まない。妻の姿は一段と眩しい対向車のヘッドライトの中で見えなくなり、後は闇に包まれる。今度は夕方家の前に出たとき最後に見た妻の姿が見える。妻は速足で向こうに去って行くのに、いつまでも歩き去っていく姿が見え続けている。そんな夢とも記憶の反芻とも取れるもやもやした頭で目が覚めた。外はもう明るくなっている。五時だった。

曇っているが雨は降っていない。

私は飛び起きて顔を洗うと、昨夜と同じいでたちで昨日調べた場所をすべて歩いてみた。よく知った家の近所ではあるが、改めて歩きながら詳細に見るとずいぶん新しい発見があるものである。昨日しらべた暗渠になっっている箇所より近くで、歩いている道路の下を五十メートルほども水路はトンネルになっていることがわかった。考えてみるとこれは道路

のところどころに鉄の格子状の蓋があつて、その下を水がザーザー音を立てて流れているのをいつも見ていることを思い出した。昨日この道を歩いたときには気がつかなかつた。そのトンネルになる直前の水路は、十数メートルにわたつて鬱蒼と萱か葦のような背の高い草が生い茂つていて、水の流れる部分が非常に狭くなつていた。ここを大人が流されるのはちよつと無理があるように思える。しかしもし水

路がトンネルになるちようど境目のあたりに落ちて、そのままトンネルに吸い込まれたとしたら、トンネルの部分は坂が急で水流は速い。したがってこの中はトンネルを抜けたところまで一気に流されるかもしれない。トンネルを抜けたところは滝のような段差があつて、その先の水路の中にも雑草が生い茂っている。

私は家に戻つた。今日は警察の搜索があるはずだ。

ひどく空腹を感じたので、買い置きの切り餅を焼いて、砂糖醤油や海苔をまいて食べた。空腹のあまり十個ほども食べたろうか。急に睡魔が襲ってきて、私はそのままになっているふとんに転がった。どれくらいそうしていたのか、電話で目が覚めた。

電話は駐在からで、今日九時ころから付近の搜索をするから立ち会ってほしいとの連絡であった。準備が出来たら連絡に行くから、自宅で待機するよう

にとも言われた。時計を見ると八時ちょうどであった。

九時にやってきたのは、駐在のほかに五人ほどの本署からの応援隊であつた。駐在以外はみなゴム長に六尺棒のようなものや巻いたロープなどを持ってゐる。中には胸まであるゴム長を履いている者もいる。水路や草むらを徹底的に搜索してくれるらしい。応援隊のリーダーらしい一人が、私に挨拶した。

声がやけに大きい。

「おはようございます。われわれ全力で奥さんを探しますのでどうかあきらめずに待っていてください
い」

そしてみなに向かつて、

「本日は、上の方からしらみつぶしに搜索をする。水路だけでなく、草むらや畑の中なども徹底的に調べられるように」

と、指示を与えた。

そのころには、昨夜いっしよに探してくれた吉田さん、自治会長の土屋さん、児島さんのご主人のほか町内の人たちが十人ほども集まってくれていて、警察と一緒に探してくれるという。みんなそれらしい姿で集まってくれている。おそらく昨夜のうちに自治会長を中心に連絡が回ったのである。中には会社を休んで来てくれている人もいるようだ。私は

みんなに丁寧な礼を述べた。

みんなは私の家の周りを丁寧に調べてから、駐在の案内で上の方に向かった。妻が折り返したはずだと私が言った場所よりさらに百メートルも先から搜索は始まった。搜索は入念に行なわれた。水路が枝分かれしているところは、その両方を調べたし、トンネルや暗渠は警察の人がロープを付けて中のほうまで入っていった。九時に始まった搜索は昼に一旦

休憩を入れて、川の本流の百メートルくらい下流までを搜索して午後五時過ぎに終了した。私は、水に入ったりはしなかったが終始行動をみなとともにした。昼は児島さんの奥さんが私の分として握り飯を持ってきてくれた。

まる一日かけた大搜索だったが妻は見つからなかった。下の方にある集会所の前に警察の車が止めてあり、本署からの応援隊の人たちはそこで作業終了

後の着替えなどをした。駐在が私だけでなく町内の人たちに、

「今日の搜索はこれで終わりますが、川の下流やその他あらゆる情報を集めて山田さんの奥さんの行方を突き止めたいと思います。どうか山田さんはもちろんのこと、町内の皆さんも、どんな小さなことでもいいですから私まで情報を寄せてください。今日は本当にご苦労様でした。皆さんのご協力をわれわ

れ一同心から感謝しております』
と締めくくった。

駐在と応援隊は車で立ち去り、町内の人たちは私に、気を落とさないように、とか諦めずにとか励まし、の声を掛けてから、三々五々それぞれの家に散っていった。私は彼らに礼を言ってから、方角が同じ兎島さんのご主人と家に向かった。兎島さんも、何も手がかりがなかったからか、無言で家まで帰って

きた。家の前まで来ると、児島さんの奥さんが、夕食は大丈夫かときいてくれた。私は自分で作れるし、材料もあるから大丈夫だと答えた。みんなの親切が胸にしみた。一人になると、いったい妻はどうしているのか、激しい胸騒ぎが襲ってきた。児島さんの奥さんに、夕食を自分で作ると言ったが、そんな気にはなれないのでただ部屋の中に座っていた。

三 白い獣(けだもの)

妻に関する何の情報もないまま半年が過ぎ、季節は冬になつていた。今年はいつともより雪が多い。

私は溜まった仕事を片付けなくてはならないので、少しづつ仕事も始めていた。そのころになると当初ほどの激しい胸騒ぎはなくなつていたが、ほとんど

毎晩のように妻が速足で立ち去るうしろ姿が夢に出てきた。そのうしろ姿の夢でいつもはつきりと見えているのが、なぜかスニーカーの白っぽいかかとではなく、ウォーキングシューズのこげ茶色のかかとである。そのたびに、いつも家の前を歩くときにはウォーキングシューズではなく、スニーカーを履いていたはずなのになぜあの日だけウォーキングシューズだったのだろうか。玄関には妻のスニーカーが

きちんとそろえてある。夕方の遠目であつたが見間違ひではなかつたのだ。もうひとつもと違ふと思つたのは、家の前を行つたりきたりするだけのはずなのに、小さな買い物用の財布がなくなつて、ことがわかつたのだ。何か買い物をするつもりで持つて出ることは考えられるが、近くのどの店にも姿を見せていないことは、あの搜索の日の聞き込みで確かめられている。

着ていたのはピンクだが洗いざらしでほとんど白に見えるよれよれの टीーシャツと黒いトレーパン。雨模様の夕方なので帽子はかぶっていない。家の鍵は妻の机にあるから持って出ていない。携帯電話はどんなときにも身に着けていたのだが、家にはないので持って出ているようだ。もちろん何度も何度もコールし続けているが電源が切れているか、電波の届かないところにいるというメッセージしか帰って

こない。そのうち本当に電池がなくなってしまった
いるだろう。充電できる状態のところにいれば別だ
が。

私の家から五キロくらいの山の麓一帯にある別荘
地で、七才の子供の行方不明事件が起きた。これも
懸命な捜索にもかかわらず何も発見できないで日が
過ぎていった。その行方不明事件が何の解決も見な

い僅か二週間後に、同じ地域で今度は二才の幼児が行方不明になった。今度は巨大な白い獣を目撃したという情報があり、大規模な山狩りが一週間にわたって行われた。山は杉や桧の植林帯と雑木に覆われた区域とが混在している。その雑木が折り重なるように生い茂った奥にいくつかの岩で出来た窪みが見つかった。窪み近くの樹木の根元には白い獣の体毛と思われるものが付いており、窪みを作っている岩

にも白い毛があつた。そして窪みの中に小さな人骨と、子供の着衣と思われる布切れが発見されたのである。猟友会の猟犬の手柄であつた。しかし発見されたとき獣はいなかつた。獣がここに戻ってくるのかどうかわからなかつたが、警察と猟友会は遠巻きにして岩の窪みを見張ることになつた。

一方発見された人骨はすぐに分析され、DNA鑑定も行われた。その結果、人骨は行方不明の二人の

子供のものであることが判明した。私は、その人骨の中に大人の女性の骨が混じっていないか、駐在を通じて聞いてもらったが、発見されたのはすべて二人の子供のものであるということであつた。

岩の窪みの待ち伏せは三日三晩続けられたが、窪みの主と思われる白い毛の獣は現れなかつた。別荘地では猟友会を中心に嚴重な警戒が続いていた。比較的登山客に人気のある里山だつたこの山は別の意

味で全国的に有名になつたが、山は入山禁止となつた。別荘地の周辺には人間と獣の住み分けのために高さ二メートルほどのがっしりした金網が張り巡らされた。それはさらに奥地の山間部の集落で実施されてきているツキノワグマとの住み分けに行われているのと同じ柵であつた。このあたりには熊のための金網は張られていながつたが、もともと住民からの要望もあつたので、今回の相次いだ悲惨な事件を受け

て、急遽工事されたのであつた。ただその後白い獣の情報はまったくないままであつた。

私は、例の岩場に妻の遺留物がなく、目撃情報も何もないため手の打ちようがないことはわかつていたが、私の妻もその白い獣に襲われたのではないかと、駐在に訴えた。駐在はその線も考慮に入れて今後の捜索に当たると返事してきた。

年が明けても白い獣の捜索は続けられた。猟友会

による山狩りも何度か行われたが白い獣は見つからなかつた。そして一月下旬のある雪の深い日、別荘地の住み分け柵の山側をゆつたりと歩く巨大な白い獣が何人かの別荘の住人によつて目撃されたのである。直ちに連絡を受けた警察と猟友会が現地に向かつた。白い獣は弱っているのか逃げもせず柵の近くをうろついている。怖いもの見たさでたくさんの人が集まってきた。私もうわさを聞いて車で駆けつけ

て、見物人の中に混じった。

白い獣は、確かに異様な大きさが犬のようである。白い毛は長く、雪や泥で汚れている。よく見ると長い首の毛に埋もれるように首輪が付いている。飼い犬だったのだ。何よりも黄色い目を光らせて牙を見せる顔は、見物人たちを思わず後ずさりさせるくらい物凄く獰猛な顔つきである。動物園の檻の中のトラか何かのようにときどき見物人に牙を向いて

威嚇しながら、あいかわらず柵のそばを離れない。

猟友会の人たちが猟銃を構えるなか、見物人の中から一人の男が柵に近寄り、撃たないでくれと猟銃を構える者たちに言ってから、白い獣に近づいた。柵越しではあるが、白い獣は男のほうに近寄ってきた。男が柵の網目から手を入れると、白い獣はそれを舐めるではないか。見物人からどよめきの声が上がった。姿はまさに獣そのものだが、まぎれもなく

これは飼い犬である。そのとき見物人の後方から、とどろき渡るような大声が放たれた。

「われわれの子供二人がこの獣に襲われ、餌食になつたんじや。早く撃つてしまわんか」

それを聞いた犬は、再び白い獣となつて牙をむき、獰猛な野獣の顔になつて柵をよじ登らんばかりに吼えながら暴れだした。銃声がこだまして白い獣はのけぞるように雪の上に鮮血を散らしながらどさりと

倒れた。手を舐めさせた男は柵につかまっただまがつくりと膝をついた。

あとで私は駐在からこの白い獣について詳しい話を聞くことが出来た。

犬はあの手を舐めさせた男が飼っていた。男は犬を車に乗せてこの地域の工業団地まで来て散歩させていた。ここは工場ばかりで車の行き来はあるが歩いている人はめったにいないので都合が良かったの

だ。気性が荒く、車で運んでいるときにも歩道を歩く人を見つけると吠えついていたそうだ。そして、その工業団地というのは妻が上のほうで折り返したと思われるところからさらに二百メートルばかり行つたところに広がっている。そしてまさに、車の中から吠えかかれた通行人というのは、私たち夫婦に他ならないのである。

私たちは、この工業団地を歩道があつて車も少な

いので運動のためのウォーキングコースにしていたのだ。しかし、その犬が散歩に連れてこられるようになってから、私たちはこのコースに近寄らないことにしていた。初めて散歩に連れてこられた犬を、はるか五十メートル先に見たとき、犬は猛烈な勢いでわれわれに向かって吠えかかり、飼い主は綱を離さないように必死で引き止めたのである。それでも犬は吠えつくのをやめなかった。私たちは直ぐに回

れ右してその場を離れたのだった。しかしそのときも、その後国道で車の中から吠えかかってくるときも、柵のところで見たような猛獣のような顔つきはしていなかったような気がする。犬にしては驚くほど大きく、獰猛な吼え声を上げていたが、それでもそのときは犬としか見えなかった。

駐在の話では、あるとき散歩中に、比較的近いところで車を降りた人を見た犬は、私たちにしたよう

に猛然と吠えかかり、猛烈な勢いで車を降りた人に飛び掛った。飼い主は突然のことで綱を離してしまつたのだ。車の男は間一髪で車の中に入ってドアを閉めることが出来た。なおも犬が運転席の窓に飛び掛りながら吠え続けるので、男は車を発進させ、工業団地の一番上の工場の中に入った。犬はそこまで追いつがって行つた。飼い主も直ぐに車で後を追つた。そこで車を止めた男は、なおも犬が吠え掛かる

ので車から降りることが出来ない。そこに飼い主の車が追いつき、車から降りてきたが、いきり立った犬は飼い主の言うことを聞かず、紐をつけたまま工場の裏の山の中に逃げ込んでしまった。それから二時間以上も飼い主はそのあたりで犬を探したが出てこなかったという。以前も一度散歩中に逃げ出したことがあったそうだが、そのときは家が近かったので、飼い主が家に帰ってみると、犬は先に帰ってい

たそうだ。今度も前よりは遠いが犬のことだから何とか帰ってくるだろうと思つたそうである。

それにしても猛獣のように人に吠えかかる犬をよくもそんな散歩のさせ方をするものだとあきれた話である。それ以来犬は飼い主のところには帰つてこなかつたのだ。それが一年位前のことだつたらしい。

その後犬は野生化しておよそ一年後二人の子供を相次いで襲つたのである。私は思わず三人じやない

かと叫んだ。駐在は冷静に、犬はあのあと解剖して胃袋の中を調べたが、子供を襲って一ヶ月以上たっているの、衣類の痕跡のようなものにはまったく発見できなかつたそうであると言つた。

私は、二人で散歩しているときにも最も怖れていたあの犬が、野犬になつてウォーキング中の妻に突然襲い掛かり、妻は物陰に曳きずり込まれて、噛み殺され、餌食にされたと思うと恐怖で鳥肌が立ち、

妻の恐怖を思つて涙が出た。ただあのと時の入念な
搜索でそのあたりの藪の中や、物陰もくまなく探し
たが、そのような修羅場の跡は見つからなかつた。
大きいとはいえ、あの犬が大人である妻をくわえた
まま曳きずつて散歩コースからかなり離れた山中ま
で行くのは困難だし、何よりも犬にとってそんな困
難な移動中に誰にも見られないというのはなお難し
い。アフリカの猛獣なら、自分より大きな獲物を曳

きずつて行く姿をテレビで何度も見たことがあるが、それは野生動物の王国と呼ばれる草原での話である。

妻の散歩コースの近くにも山はあり、一旦そこに引つ張り込めば人に見られないでさらに山奥に引つ張っていくことは不可能ではないが、散歩道から近くの山に入るには必ずどこかの畑か田を横切らなくてはならない。襲った人間の大人を曳きずつて畑などを横切るとかなりの曳きずり後が残るはずである。

あの捜索のときそのような曳きずり跡は本当になかったのだらうか。そのような想定はしていなかったと思う。このたびの犬でなくても、このあたりでは熊ということも充分あり得る。そもそもあのときの捜索隊は警察犬を連れてこなかった。それには駐在も黙ってしまった。しばらくして、駐在が口を開いた。

「奥さんがあの犬に襲われたと仮定すると、誰かが

犬の吼え声とか唸り声や、奥さんの悲鳴のようなもの
を聞かなかつたのでしようか。あの吉田さんも奥
さんが散歩しているころ比較的近いところにおられ
たはずでしょ。いきなりのどを深々と咬まれて悲鳴
を上げる間もなかつたとしても、現場に血痕があつ
てもよさそうなものだし、それも見つかりませんで
したよね」

そして

「ここでは熊の出没は現実的なことですが、基本的には、熊は人間を食べないと聞いていますし」とやや口ごもりながら付け加えた。

「それを言うのなら、犬も、特に飼い犬だった犬も基本的には人間は食べないと思いますよ」

私はテレビで見た、ライオンが鹿やしま馬を襲ったとき、首に食いついて獲物が死ぬまで決して離そうとしないのを思い出した。それがしま馬ではなく

妻の首だと思つと、さらにぞつとしてまた涙が出てきた。ライオンは獲物を曳きずつていくがそのときだらだらと獲物の血を流しながら曳きずつているのだらうか。獲物の血はライオンの牙を伝つて飲み込まれているのかも知れない。それにしても多少の血痕くらいはあつても不思議ではない。そんなことを考えているうちに、私にはあの犬が何だかライオンに思えてきてしまふのだつた。やはり妻はあの猛獣

犬の犠牲になった可能性はゼロではないと思えるのであった。それにしても、あの二人の子供もその親たちもあまりに気の毒である。

駐在によると、飼い主は危険なペットの管理に関して重大な義務違反を犯した罪で逮捕され、これから裁かれるらしいとのことであった。

なおあの犬は、グレート・ピレニーズというヨーロッパ産の超大型犬の雑種で、本来羊などの家畜を

狼や熊から守るために改良された性格のおとなしい犬なのだそうだが、この犬の場合は獰猛な性格を残していたようである。

四 白骨死体

それからさらに一年近くたった十二月の半ば、私

たち夫婦がよく蛍を見た橋から五十メートルも離れていないところで、人間の白骨が発見された。それは川が国道をくぐる辺りで、ぎっしりと川草が茂つた中にうずまっていた。発見したのは川底の改修計画の調査のために川に入った県の土木関係者だった。そのニュースが町内に広まったとき、私も近所の人たちも、間違いなく妻が発見されたと思った。ただし白骨は両足と、片腕の部分がばらばらになって

いて、人体のそのほかの部分の骨は見つからなかつた。

あの失踪翌日の大搜索のときにこの場所は搜索範圍に入っていた。したがって、そのときに見逃したのか、あるいはそのときにはその場所にはまだ無かつたものなのかも知れない。なにしろあれから一年半たっている。

ただちに骨は分析されると同時に、人体の他の部

分の骨の発見にも力が入れられた。警察では一応地理的に私の妻の失踪との関連を念頭に置いたようだが、それ以上に他の事件性が高いとして、搜索範囲は妻の場合とは桁外れの広さで行われた。分析の結果では、骨は推定で死亡一年以内の女性のものであることがわかった。

私は、駐在をたずねて話を聞いた。私が単なるやじ馬ではなく、妻の不可解な未解決の失踪事件の当

事者であるため、駐在は親切に説明してくれた。死亡推定期はかなり誤差があるもので、一年半であっても不思議ではないと言っていた。ただ、これも推定であるが発見された骨からは比較的若い女性の可能性が高いとの見解が出されているということであつた。

その骨が妻のものである可能性はあまり高くないというのであるが、私の中では捜査関係者の意識以

上に、妻かもしれないという意識が強かった。

その後山口県の山中から、ある捜索願が出されていた三十歳の女性の着衣の一部が発見され、さらに近い場所からその女性のバックと思われるものが発見されて、にわかには大きなニュースとなり、私の家の近くの川で発見された人骨との関連が取りざたされ始めた。

しかし、この事件もその後しばらくはニュースで

騒がれ続けたものの、解決の糸口が見つかからないままとなつた。

家族が行方不明になるといふ、家族にとつては普段想像もしない大事件であつても、何の手がかりもないまま年月が経過すると、当初の衝撃は徐々に薄れ、残された家族の間には諦めの影が忍び寄つてくる。

母親が消息不明になつて二十年以上になるといふ

また別のあるニュースが流れたとき、妻が居なくなる前の私だったら、行方不明などというものは、犯罪か故意でなければありえないことだと思ったであろう。しかし現実には自分の体験と考え合わせると、それが当初いかに不可解な事件であつても、決してありえないことではないと思えるようになっていた。

結局、白い獣の場合も、白骨の場合も妻との関連性が薄いということではあつたが、完全には否定し

きれないといった状況のまま月日だけが過ぎていった。

五 意外な場所で

白骨が見つかって以後、何の進展もなく、警察からも連絡がないまま三年が過ぎた。

そんなある日、町の駐在から電話があつた。いまは、失踪当時の駐在とは代わつていて、一年ほど前に赴任してきた人である。当然、直接妻の捜索にかかわつた人物と違つて、失踪事件に対しても私に対してもよくいえば冷静、悪くいえば事務的である。その駐在からの突然の電話である。

電話ではややこしいのですぐに我が家に来てくれるという。十分くらいしてチャイムが鳴つた。彼

の赴任後も一、二度搜索の進展について聞きに行ったりしているので、初対面ではない。前の駐在よりも若く、はきはきとした感じの人である。

駐在はまず、四年半前の妻の失踪事件について書類を見ながら確認をした。私はあらためて当時のことと、その後の経緯について駐在とやり取りした。駐在は、それからようやくこの日の用件を切り出した。

それは、北海道の虻田郡倶知安町というところで身元不明の女性が保護された。それがなぜ私に関係があるのかというと、その女性は自分の名前も住所も年齢も何も答えられない状況になってしまっているが、何故か大畑というこの集落の地名だけは口にしたのである。集落の名前といっても、正式の行政区分の町名とは限らず、その女性が口にしたのは、昔から言い慣わされている字である可能性もある。

そのため警察としても、ここを探し当ててのにかなり時間がかかったらしい。それに大畑などという地名は全国に数え切れないほどあるらしく、それらの中から現在行方不明者がいるという条件を満たす大畑を特定したのだそうだ。その条件を満たす大畑は三件あり、ここはそのうちのひとつとして調査対象になったというわけである。

その女性というのは、身長百五十センチくらいの

小太りで、年令は六十歳前後、頭は白髪、保護され
たときの服装は紺のジャージーに工事用のグレーの
防寒ジャンパーを着ていたという。身元がわかるよ
うな所持品は、カメラとノートなどで、カメラには
山の写真がたくさん撮られていたそうである。服装
以外は妻に当てはまらなくはない。妻は特にカメラ
好きというわけではないが、ドライブなどで夢中に
なつて風景や花を撮ることもあるから、山の写真を

撮っているから妻でないとは言い切れない。カメラは、散歩にカメラを持って出た形跡はないから、何らかの方法で手に入れたのだらう。服装も四年半も経っているのだから、我が家の前をウォーキングしていたままということはあるまい。

駐在は資料の中から、女性の写真というのを開いて見せてくれた。引き伸ばされてコピーされたその写真は二枚あって、顔をアップで撮ったものと、全

身の立ち姿が正面、真横、うしろ姿の三枚が一ペー
ジにまとめられているものだった。どこかで見た犯
罪者の写真みたいだ。写真はあまり鮮明ではなかつ
たが、そこには一目見て「私の妻ではない」と答えら
れるような姿が写っていた。顔は私の妻よりも長め
で、眉毛が濃く女性にしては強面であつた。妻はど
ちらかというと童顔の残る人懐こい顔つきである。
また全身の姿も、確かに妻は小太りといえるが、写

真の人はかなりの肥満で、妻よりも猫背で姿勢が悪かった。少なくとも失踪するときまでの妻と比べればのはなしだが。

私は、写真の印象からすると妻ではないような気がするが、なにしろ四年半たっているし、もし生きているとしてもその間妻がどのように暮らしていたのか想像がつかないので、完全に妻ではないと否定しきることもしきれないかと駐在に伝えた。

駐在は、もし確認のために保護されている北海道の倶知安に行つて見る意思があれば、旅費などの便宜は当局でみると言った。私は、一応行つて確認したいと言つた。駐在は連絡を待つて欲しいと言つて歸つていった。

翌日の駐在からの連絡では、とりあえず倶知安町の警察まで行つてほしい、その後はそちらで段取りするからそれに従つてほしいというものであつた。

交通費は全て領収書を取って、あとで清算するそう
だ。また自分の身分を示すものを忘れないようにと
念を押された。

私は、その日のうちに千歳までの航空券を予約し
た。翌朝、最小限の着替えなどをリュックに詰めて
出かけた。遠隔地に出かけるのは妻が居なくなつて
から初めてである。千歳には昼過ぎに着いたが、そ

こから鉄道で札幌、小樽などを経て倶知安町までは時間がかかり、現地の警察署に着いたのは午後六時を過ぎていた。受付で来意を告げると話は直ぐに通じた。札幌から時間がかかったことを言うと、レンタカーで来れば二時間少々で来ることができたのと言われた。

問題の女性は、体調が万全でないので、町内の病院に保護されているという。この時間だと、女性は

夕食をとっているころだし、夜は早めに休むということなので、面会は翌日の午前中ということになった。そして私のために警察署のすぐ近くの旅館を取ってくれた。出発前に電話を入れておいたので手配が整っている。

旅館は、典型的な小さな町の駅前旅館といった感じであつたが、倶知安は観光地であるためか、小さいながらもきれいな宿であつた。宿は空いていてほ

かに泊り客が居るようにはみえなかつたが、風呂を
すませてから案内された食堂には、もう一人私と同
世代かと思われる、私と同じように頭の禿げ上がつ
た男性が、すでに夕食を始めていた。

仲居が飲み物はどうするかと聞くから、いらな
いと答えた。普通こういうときに仲居は
「どこから来たか」
とか

「観光ですか」

などとありきたりのことくらいは聞くものだが、今は何も聞かない。おそらく警察から依頼の客だから、何か事情があると思つてゐるのだらう。そういえば、もう一人の客も仲居が茶を注ぎに来たときに、一言も話してゐなかつた。その客はまもなく自分の部屋に戻つていった。

食堂といつてもただの広間のようだが床の間に大

きなテレビが置いてある。私はテレビの上にあつたリモコンで電源を入れた。地元のニュースをやつていた。広島の家を出るときには新緑真つ盛りであつたが、このあたりの春はまだらしい。山の木々はほとんど枯れたままで、画面の後方に写っている形のいい山はとつぷりと雪をかぶっている。

私はここが羊蹄山に近い町であることを思い出した。二十年以上前になるが、妻と一緒に羊蹄山に対

座するニセコアンヌプリとイワオヌプリに登ったことがあつた。そのときは知り合いに紹介されたニセコのペンションに泊まつたので、倶知安の街中には入らなかつた。私はニユースを見ながら、ここが想い出のある地域であることを思い出した。

夜に入つて気温がかなり下がつてきているように感じた。このあたりは、日によつてはまだ雪が降ることもあるのだらうか。そういえば妻ではないかと

見せられた写真の女性は防寒ジャンパーを着ていた。もつともいつ撮った写真かわからない。最近撮ったばかりではないだろうから、真冬だったのかもしれない。ニュースが終わったところで私は部屋に戻った。

部屋には暖房が入っており、蒲団が敷いてあった。隅の方に寄せてある机の上に新聞があつた。私は一ページずつめくって見出しを拾っていった。特に地

方版は丁寧に見た。何か行方不明の女性に関する記事がないかと思つて丹念に小さな記事も見逃さないようにした。女性が保護されてから日が経っているし、私が面会に来たことも、残留孤児の家族との面会のような大きなニュースでもない。関係ありそうな記事はなかった。

何もすることがない私は、床に入った。まだ八時過ぎだった。さきほど食堂にいた男の部屋は隣らし

い。テレビの音が低く聞こえる。もしかしたら別の「大畑」からやってきた男かもしれない。もしそうならあした面会場所でもまたいつしよになるのだらう。陰気な感じの男だ。

しばらく明日の面会の場面を想像しながら天井の木目柄を眺めていたが、朝が早かったせいかいつの間にか眠ってしまった。

翌朝、食事を済ませて部屋でテレビを見ていると、仲居が迎えの車が来ていると知らせに来た。きのう警察は九時ころ迎えに来るといつていたが、定刻だ。表に出るとやはり昨日の男も車に乗ろうと出てきている。車はパトカーではなく、道警俱知安支部と書かれたワンボックス車だった。二人の警察官がいたが、一人が、

「お二人とも本日、当方で保護している女性に面会

を希望されて来られた方です」

と私たちを引き合わせた。私はただ、

「おはようございます」

とだけ言ったが、先方は口の中で、

「はあ」

と小さく言つて頭を下げた。印象としては昨晚もそう思ったが、いかにも人生に疲れているような感じである。私も他人の目にはそう映っているのかも知

れないと思つた。旅館の女将が見送りに出ていて、「行つてらつしやいませ」

と丁寧にお辞儀をした。そういえば、今晚泊まるのかどうかも、宿代のこと何も聞かれなかつた。すべて警察が手配しているようだ。まるで遺体確認か何かに行く遺族の出発のような湿っぽい雰囲気だ。

車は倶知安の街の中心部に建っている大きな病院の玄関に横付けした。私は、昨日女性の体調が万全

でないと言っていたことを思い出した。

宿から非常に近いところで、これなら歩いてきてもよかつたのに、と思うほどすぐであつた。羊蹄山が大きく見えている。私は羊蹄山と向かい合う位置の山々を見たが、どれがニセコアンヌプリなどかわからなかつた。

警察官の一人は病院の受付に行つて何事か告げて

いたがすぐに事務員を伴つて戻つてきた。私は病院の廊下を五人連れ立って歩きながら、男と同時に女性の前に連れて行かれるのかと戸惑つていたのだが、私たちは一旦応接室のような部屋に通された。互いに言葉を交わす間もなく、まず私一人が、案内してきた警察官のひとりに促されて再び廊下に出た。エレベーターで二階に上がつて、ある病室の前に来た。個室である。警察官はノックをしたが返事を待たず

に扉を開けた。私はよく知っている妻の姿を思い浮かべながら、警察官のあとについて部屋に入った。パジャマのまま女性はベッドから出て横向きに腰掛けていた。私たちが入っても振り向かない。

瞬間的にこの人は私の妻ではないと思った。そのとき私はがっかりしたのか安心したのか、自分の感情が整理できなかつた。

警察官は女性の正面に回って、

「身内かもしれない方が来られましたよ」
と声をかけた。女性は声を出さずにかすかに頷いた
ように見えた。警察官に促されて私も女性の正面に
回った。

「こんにちは」

できるだけはつきりした発音を心がけて言った。女
性の周囲への反応があまりよくないと感じたからだ。
女性はやはり声を出さずに小さく頷いた。そのとき

女性の顔に、微かに笑みがよぎったような気がした。そして女性は不安そうにも見える目を見開いて、私の顔を見つめた。私はその顔、表情、体つきの中に妻の痕跡を見つけようとした。

妻だったら右か左の腕にできものを手術した跡があるはずだ。私はそのことを警察官に言つて、腕を見せてもらおうよう頼んだ。警察官はまず右のパジャマの袖をめくつて見せた。腕全体に目を背けたくな

るような火傷と思われるケロイドがある。包帯は取れていたが傷跡はまだ生々しい。もちろん私が見たかった手術の跡など認めようもない。左腕も見せてもらったがこちらにも火傷の跡が同じように広がっていた。あらためて女性の顔を見ると、顎から唇をかすめるようにして耳の下辺りにかけて、腕ほどではないが皮膚がひきつったような跡が認められる。これも腕の火傷のときに受けた傷であろう。私は警察

官に目配せをしてから、部屋を出た。先ほどとは別の部屋に案内された。何処の病院にもあるカンファレンスルームである。デスクにはコンピュータの大きな画面があつた。

「奥さんではなかつたようですね」

警察官は、私の見解を聞く前にこう言った。私の女性の前での反応から察していたのだらう。

「酷い火傷をされていますね」

私は腕の手術跡が確認できなかつたので聞いてみた。「実はあの女性が保護されたのはある火災の現場です。しかし火災は、カーテンと天上の一部を焼いたくらいで消し止められたと聞いております。女性がその場所にどうしていたのかわかっていません。女性性は消防士に救出されたのですが、そのとき女性はすでに黒こげ状態になっています。子供を両腕に抱えていたそうなのです。消防士が子供を女性から引き離

したとき、子供の衣服はまだ煙を出していて、女性の腕の皮膚も火傷を負っていてかなりめくれる状態だったと聞いています。女性は直ぐにこの病院に搬送されて火傷の治療を受けました。火傷の傷はご覧のように一応治つてきていますが、現場から救出されて以後一言も言葉がないということ。火事のショックでそうなったのではないかということ。です」

私は、女性が子供を両手に抱えて、という説明に衝撃を受けた。四十年近く前の私たち夫婦に起きたある悲劇をまざまざと思い出したからである。

結婚して間もなく生まれた長女が三歳のとき、車で一時間ほどの実家に娘を預けて二人でコンサートを聞きに行ったときのことである。コンサートがすんで実家に子供を迎えに行った。実家が近づくと消防車やパトカーでものものしい。とつさに近所で火

事があつたらしいと思つた。どの車も赤色灯を回転させているが、すでに鎮火しているらしい。実家に被害が及んでいなければいいがと思ひながらさらに家に近づくこうとすると、途中で警察官に止められた。両親の家がこの先にあることを告げると通してくれた。それでも実家の直ぐ前までは近寄れず、五十メートルくらい離れたところで車を降りて小走りで実家に向かった。半分も行かないうちに火事が実家そ

のものであることがわかった。心臓が止まりそうなシヨックを受けながらも走った。そのときはまだ、両親と私の娘は焼けた家の外で呆然と立っているよ
うな気がしていた。

実家は全焼だった。屋根も黒く焼けた梁が一部残っているだけで瓦は全て落ちている。実家は全焼しているが庭が広いため幸い近所への延焼は免れたようだ。

私たちは必死で三人の姿を探したが見当たらない。近所の人在家に入れてくれているのだと思った。

向かいの奥さんが私たちを見つけて駆け寄ってきた。

「おじいちゃんとおばあちゃんとの連絡が取れんよ」

「うちの娘も？」

「嬢ちゃん来てたのですか、えー、大変じゃ」

向かいの奥さんは半泣きである。私たちが焼けた家に近づこうとしたら消防士に止められた。まだ危険だからという。妻は最悪のことを想像したのか、膝から崩れるようにその場にへたり込んでしまった。みると焼けた家の中で消防服を着た人たちが動いているのが見える。家の中の消防士から懐中電灯をまわす合図と何か大声で言っているのが聞こえた。

外で待機していた消防士の中の二人が担架を持つ

て駆け込んでいった。そして直ぐにもう一つ担架が持ち込まれた。私は事態を理解した。妻は私の脚にすがりつくようにして震えている。

周りからはさらにシートをもった消防士たちが何人か駆け込んで行った。壁はあちこち焼け落ちてい
るが、いま消防士たちがしている作業の様子はちよ
うど崩れ落ちていない壁や植え込みの陰になつて見
ることができない。直ぐにでも駆け込みたいと思つ

ている私を消防士が制しているので動けない。シートに隠されながら担架が二つ救急車に運ばれた。警官が一人私たちのところに駆けてきて、

「身内の方ですね」

と大声で聞いた。私が頷くと救急車のところに来るように促された。私たちはそこで地獄絵のような状況を見た。

父も母も衣服と頭髪はほとんど焼けてしまい、剥

き出しになつた皮膚も黒く焼け爛れて、血か汁のよ
うなものが流れている。そして、父か母かどちらか
区別がつかない一方が、固く抱きしめるように小さ
なものを抱えている。その抱えられたものも人間と
は思えないほど黒焦げになつている。もちろん三歳
の娘である。妻は駆け寄つて祖父か祖母に抱かれて
いる娘をもぎ取るように自分の胸に抱いた。骨が剥
き出して祖父か祖母の腕はコトンと音を立てて救急

車の床に落ちた。

妻はそれには構わず、娘を捧げるようにしながら号泣し始めた。それは泣くというよりあらん限りの声で叫んでいるようであつた。私は妻と娘のその姿を見つめながらただ立ち尽くしていた。いつときして父と母のことに思いが至り、私は近寄つて二人の状態を見た。無残ではあるが、よくみると苦痛に顔をゆがめながら必死で孫を守ろうとしているような

表情が読み取れる。もつともそれは私が勝手に想像したことで、実際は焼け爛れた顔から表情を読み取ることなどできなかつたかも知れない。

それから四十年間、私たちはこの心の痛みを忘れたことはなかつた。まだ若かつたが、次に生まれた子がまた何か事故にでも遭つたら、と思うと不安でその後は子供を作らなかつた。しかしそれでも毎日の生活に追われるうちに、暮らしの中に少しは楽し

い場面もできるようになっていった。長年二人で支えあつてやつと獲得してきた平安な暮らしであつた。それが四年半前の妻の失踪によつて、私は再び底なしの喪失感の中に放り込まれた。今度は慰めあう相手がいない。ただ救いは、歳をとつたことで心のナイーブさは、娘が三歳のころに比べようもなく失われている。そのことで病の苦痛や傷の痛みを、黙つて舐めることで耐えている老犬のように、私も耐え

ることができるとなっていた。

「あの人はどこで火事に遭われたのですか」

私は、何となく娘の事故や、ニセコアヌプリ登山などのことを重ねながら聞いた。

「ニセコのペンション火災の現場です。たしかそのペンションの何周年記念とかいうパーティーのときに
出火したと聞いています」

「死傷者が出たりしたのでしょうか」

「いや、燃えたのは一部屋だけで、亡くなつたのはあの女性が抱いていたという三歳の女の子だけです。あとはパーティに呼ばれた客も、泊り客も従業員も合わせて三十人くらいいたそうですが、軽い火傷や擦り傷程度の軽傷ばかりでした」

「抱いていた女の子というのはあの女性のお孫さんか何かでしょうか」

「その辺のことは、あのペンションのオーナーさんが近くに住んでいらっしやるので、もし詳しいことがお聞きになりたいのでしたらお会いになつてみたらどうでしょう。そうしたら、あの女性のことについて何か情報が得られるかも知れませんよ」

「火事に遭ったばかりなのに会つてくれるでしょうか」

「連絡を取ってみましょう」

警察官は直ぐに携帯電話を取り出して、インプットされているらしい相手の番号を探してコールした。相手は直ぐに出たらしい。

「水本さんですか・・・」

この瞬間、私はニセコアンヌプリ登山のときに泊まったペンションの女性オーナーの名前、水本智子を感じ出した。

「・・・いま火災のときの女性の身内ではないかと

おっしやる方が当地に来られているのですが、少し水本さんにお話が伺いたいと言われるのですが、ご都合はどんなでしようか・・・もちろん面会されませんでした・・・奥さんを探してこられたのですが、どうもご覧になっただけでははつきりしないらしいんです・・・それで・・・よろしいですか、ではこれからお連れします」

私は、二十年以上前に水本という名のオーナーが

経営するペンションに泊まったことがあることは警察には言わなかつた。病院から水本という人の家には歩いて行つた。

『水本寓』と表札の掛かつたこぢんまりとした家は、外からは経営するペンションが火事を出すという出来事に遭つたような雰囲気は何も感じられなかつた。

玄関に出てきたのは、二十年前と變つていないよ

うな水本智子その人だった。相手も直ぐに私であることに気づいたようであったが、一応私の自己紹介を待った。私と警察官は部屋に通された。部屋は綺麗に整えられていたが、片隅に書類のようなものが積み重ねられている。火災に関するものかも知れない。

私は、広島の子田というもので、二十年くらい前ニセコのペンションに夫婦でお世話になって山に登

つたりしたことを言った。

「お顔を見たときすぐにわかりました」

と水本智子は、二十年たつていても美しい顔で人懐こく言った。

「お知り合いだったのですか」

警察官が驚いて聞いた。水本智子はそれには答えな
いで、

「奥さんをお探しとか」

「ええ、もう四年半も前なのですが、家の前から突然いなくなってしまったのです。これまでにいくつかの手がかりはあつたのですがどれも確定的なものではなくて・・・今回も一応来てみたのですが、ある意味ではたった四年なのに顔を見ても妻かどうかわからないんです。というより私は妻ではないと思うのですが、いろいろ話を聞くと状況が少しひっかかるものがあるので、ここまで来てみました。おまけ

に水本さんのペンションとかかわりがあるという奇遇まで重なったので、何かお聞きしたくなってお邪魔したというわけです」

「そうでしたか」

水本智子は感慨深そうに頷きながら私の話を聞いていた。そして、

「病院で面会された方は、奥様ではないと思います。奥様だったら、私はすぐに気が付いたはずですよ。い

まこうしていても、奥様のお姿もお顔も思い浮かべることが出来ません。あの方は火災の二日前に私どものペンションにお一人でおいでになりました。その翌日はお一人でニセコ登山をされました。なんでも山の記事を雑誌に書かれている、その世界ではよく知られた山岳ジャーナリストなんだそうです。お泊りになったときも、ご自分の書かれたという記事や写真が載っている山の雑誌を見せてくれました。そ

の夜でした、火災が出たのは」

「火災の原因はわかっているのですか」

「もちろん私どもの責任なのですが、直接の原因はお客様の部屋で、子供さんがライターで遊んでいてカーテンに引火したのが原因らしいのです」

「その子供さんが亡くなったのですか」

「ええ、その山岳ジャーナリスト、お名前を今田さんとおっしゃるのですが・・・実はこのお名前は違

うらしいのですが、今は仮にそう呼ばせてもらうことにしましょう。今田さんと亡くなつた子供さんとは他人なのですが、たまたまその子供さんが今田さんと仲良しになつていたので、原稿のメ切が近いとかでお部屋で仕事をされる今田さんに、両親はその子供さんを預けてパーティに出ていたのです。だから火が出たとき御両親は一階のパーティ会場でした。そのご両親と子供さんは今田さんの隣の部屋に投宿

中でした。

今田さんが、仕事に集中していたためか、お手洗いにちよつと席をはずしたときだったのか、目を離したほんの少しの間の出来事だったようです。幸いにもたまたまその部屋の前を通りかかった私どもの従業員が中での叫び声を聞いて飛び込んで手際よく消火器を使ってカーテンと天井の一部を焼いただけです。なのでですが、子供さんは燃え上がったカーテンに

巻き込まれてしまい、それを救い出そうとした今田さんも大火傷を負ったということだったようです」

私は、両親に預けた孫を火事で死なせるといふ、四十年前の自らのあまりにも似た状況に驚いた。今度の場合孫を預かった本人は生きてその責任と苦しみを受けているのである。山岳ジャーナリストという、それ以上ないような活発な女性が、あのよう
に完全に魂が抜けたよう状態になってしまったので

ある。私には、そうなつてしまつてもまつたく無理もないと自分のことのようにわかるのだった。私の両親の場合は、一緒に死んでしまつたことはむしろ彼らにとつて救いだつたと思つてゐるのだ。

「亡くなつた子供さんのご両親はどうされているのですか」

「東京にお帰りになつて、すでにお葬式もすまされました。私も参列しましたから。今田さんは火傷が

かなりの重症で、精神的にもあのような状態だったので、ずっと病院でした」

私はこのときおかしなことに気がついた。ペンションに投宿していて、しかも登山関係者には名の知られた人物だったら、警察はどうして今田と山田という名前の違う人間を家族ではないかと引き合わせたりしたのだろう。

「あの方が今田さんというお名前であることは、わ

かっていたのですよね。今田さんのご家族はどうなさっているのですか。ご主人とか」
私は警察の人にそのことを聞いた。

私は、さつき水本智子が『今田という名前はちよつと違うのだが』といったのを覚えていたが、ペンネームか何かの関係かと思っていた。これには水本智子がさらに説明した。

「それが、宿帳に記載された千葉県の住所は間違い

か何かで、そのような住所も電話も実際には無く、彼女が見せてくれた記事の出版社にも問い合わせましたが、確かに今田という山岳ジャーナリストはいらっしゃるけど、彼女とはぜんぜん別の方だったのです」

「でも前の日にニセコに登られたとか」

「ついて行ったわけではないのですが、ちゃんとそれらしい格好をして出かけられましたからね」

ここで警察の人が説明に入った。

「お話の通りで、手がかりがなくなってしまったのです。あの女性のご覧の通り放心状態のまままで何もお話になりませんから、私どもで手がかりを得るために持ち物を調べさせてもらいましたが、着替えのようなもの以外身元がわかるようなものは何も持っていないらしいのです。ただその中に

「大畑婦人会」

と書かれたタオルが一枚あったのを唯一の手がかりとして山田さんにご連絡したというわけです」

確かに、私の住んでいるところは大畑という字で、その名前の婦人会もある。家内は婦人会には参加していなかったが、何かのときにタオルの一枚くらいは貰っていたかもしれない。その限りでは、私のところに関わり合わせが来てもおかしくない。よくぞそれだけの手がかりで私を探り当てたと思うくらいだ。

でもあの人はやはり私の妻ではない。

そのとき警察官の携帯電話が鳴った。警察官はあわてて廊下に出て電話を受けていたが、すぐに戻ってきた。警察官は私に丁重に頭を下げてから、

「わざわざ遠くからおいでいただいたのに、奥様かも知れないと言うのは違っていてすみませんでした。実はもうおひとり千葉県からおいでになった方が、自分のご家族であることを確認されたそうです。今

朝病院まで我々の車で一緒に来られた方です。詳しいことは、私はまだ聞いておりませんが今の電話では、奥様ではなく妹さんということのようでした」

「とにかくお身内の方が見つかつて良かったですね」

水本智子が美しい笑顔でいった。彼女は警察官に向かつて、私が自由の身になったことを確かめてから私に提案をした。

「では、山田さんせつかくここまで来られたのですから私どもに一泊されてからお帰りになりましたませんか。二十年ぶりに不思議なご縁でおいでになったのですから、このままとんぼがえりというのももったいないですよね。急いでお帰りにならなくても大丈夫なのでしょ」

私も一日二日を急ぐ身でもなかつたので、ありがたい提案だった。

「そうさせてもらえるとありがたいですね。でも火事があつたばかりなのでしょ」

「ええ、それもあります。今日はここにお泊りいただいたらと思つておりますの」

「それはご迷惑をおかけすることになるじゃないですか」

「大丈夫ですよ。久しぶりにゆつくりお話したいこともありますし」

私と水本智子には警察官がいる前では話せない昔話があるのだ。私は水本智子の提案に乗ることにした。

警察官は、その前に一度警察署に戻って確認書類に署名して、帰りの旅費を受け取るようにというので私は彼と一緒に病院の駐車場まで歩いて行った。

その途中で警察官は、「お親しいのですね」

と言ったが、私は

「そう言うわけではないのですが」
と言葉を濁した。

病院の駐車場にはまだワンボックスカーが置いたままになっていた。今度は私一人が同乗して警察署まで行った。もう一人の人は身内が見つかったわけだから、いろいろあるのだろう。

警察署では、面会した人物が私の搜索願の人物に

該当しなかったことを確認したという書面に署名して、事務所で俱知安から広島までの列車や飛行機代を含む往復の交通費と、一日三千円の食事代というのを三日分支給された。そして、

「山田さんに関しては、今回の件はすべて終了しました」

と先ほどから行動をともにしてきた警察官が言った。私は今田と名乗った女性のことを聞いてみた。事務

的な手続きをしてくれた警察が、個人的なことなので詳しいことは差控えるがと断ってから、次のような話をしてくれた。

お兄様という方が言われるには、あの女性はときどきご自分を山岳ジャーナリストと言って山に出かけていたそうで、実際に登山記事を書いて投稿したりしていたそうです。今田という名前はたまたまあの時目についた名前前で、大抵は自分の名前を書いて

いたそうである。

ここまで車で送ってくれた警察官が、

「水本さんのところに行かれるのでしたら、車でお送りしましょう」

と言ってくれたが、私は、羊蹄山でも眺めながらぶらぶら歩いていくからと辞退した。あまり遠くはなさそうだったし、警察官に何か変な勘ぐりをされていくような嫌な感じがしたからでもある。

警察署の前からも羊蹄山はよく見えた。私はまず先ほどの病院を目指して行き、そこからだったら水本智子の家までは先ほども歩いて行つたので、わかるはずだと思つた。

病院の大きな建物は警察署を出ると見えていたし、水本智子の家も病院からすぐだった。これでは『車でお送りします』などというのは、警察としてのこういう場合の形式的な言葉なのである。

私は道に迷うことも無かったが、途中ニセコアンヌプリとイワオヌプリが見えているのかを通りがかりの人に聞いた。それらの山はよく見えていて、何となく登ったときの記憶もよみがえるような山容を見せていた。私は今朝ほど病院の前から羊蹄山を見たときに、羊蹄山と自分のいる位置を結んだ反対側を見回したために見つからなかったのだ。実際には自分の位置と羊蹄山とニセコアンヌプリを結ぶと、

二つの山はほとんど九十度くらいの角度になるのだ
った。

水本智子は昼食を作って待っていてくれた。二人
だけになると彼女はいつそう親しそうに話し始めた。
私が、自分のことをマツムシソウに例えてくださつ
たのが忘れられないと言った。

ニセコに登ったときは水本智子のペンションに二
泊した。私たち夫婦は二日目に登山をしたのだった。

その日の夕方は近所の温泉場に行つてゆつたりと露天風呂につかり、ペンションの食事を楽しんだ。広島から車での北海道旅行だったので、久しぶりにゆつくりとした時間を楽しんだのだつた。そのよる部屋で旅行に出てから初めて妻と交わつた。妻はそのまま、登山の疲れもあつて寝込んでしまつたが、私は汗を流そうと階下に降りてシャワーを使った。シャワーから出て部屋に戻ろうとして食堂の脇を通る

と、

「お茶をいっぱいいかがですか」

と水本智子に呼び止められた。後片付けを済ませてゆつくりしようとしているときのようにだった。私は軽い気持ちでよばれることにした。そのとき水本智子は離婚しており、ペンションは娘と二人でやっているのだった。娘には愛人がいてペンションの中の一室で同棲しているようだった。

誰もいない、照明を最低限に落とした食堂の片隅で、私と水本智子はどうということの無い世間話を交わした。水本智子は、良い奥さんだとか、一緒に山登りするのが羨ましいなどと言った。私が言ったのも、良いペンションだとか、食事が美味しいということくらいだったと思う。だが、そのとき水本智子はそっと私に顔を近づけて自分の唇を私の唇に触れさせた。それは微かに触れただけだったが、一度

はなれたあともう一度、今度は少し長い間触れていた。私を見つめながら顔を離すと、彼女はゆつくりと立ち上がって二人のカップを片付け始めた。そして、

「ゆつくりお休みなさい」

と言った。私もただおやすみなさいと言って部屋に戻った。私はベッドに入ってからもしばらくそのロマンチックな雰囲気を楽しんでいたが、昼間の疲れ

でじきに眠ってしまった。

翌朝の出発は早かったので朝食はことわってあつたし、清算も前の晩に済ませておいた。

私たちは他の客を起こさないように、そつと準備をして階下に下りていった。すると水本智子はすでに起きていて、私たちのために握り飯の弁当を作ってくれていた。私たちはありがたくそれを持たせてもらった。水本智子は昨夜のことなど何もなかった

ように快活に振舞っていた。車に乗るところまで送ってくれた水本智子は、楽しかったといつて握手の手を差し出した。私はその柔らかく暖かい小さめの手を握り返した。彼女は家内にも手を差し出して、是非また来てくださいななどと言った。

私たちは、広島近くまで帰ったとき、この大ドライブの仕上げと称して、三瓶山に登った。三瓶山に美しく咲き乱れていたマツムシソウを見て、家内と

あのペンションの奥さんのイメージだねと話したものだ。そのときの家内のイメージと私のイメージとは違っていたかも知れないが、私は帰宅してからの礼状にそのことを書いたのだった。

今回私は、今も美しい水本智子を前にして、ロマンチックな想像をしたが、それには彼女が釘を刺した。

「あのかきは失礼しました。でも後悔していないし、

今でも思い出すと胸が熱くなります。でも今はもうお互いに若くないし、それに山田さんは奥様が行方不明という大変なときですから・・・こうしてお話しする機会を下さっただけでも感激しているのですよ」

「いや、お招きいただけるとは夢にも思いませんでした。というよりお会いできただけでも大変な幸運です。もちろんこれ以上ご迷惑をおかけするつもり

はありません」

私も、これ以上の関係になどならないほうが、二十年前の思い出はマツムシソウのような清らかな美しさを失わないのだと思った。

失踪者の搜索願に端を発した倶知安行きは、本来の目的を果たすことにはならなかったが、思わぬ余禄をもって終わった。一人だけの家に戻ってきた私

は、
またも喪失感と同居する生活が始まった。

六 諦め

その後も失踪届けに基づく情報が三度ばかりあったがいずれも確かめるまでも無い情報ばかりであった。妻が忽然と姿を消してしまつてから六年の歳月

が流れた。私は自分自身の生活のために細々と執筆を続けてきた。

妻がいるときから、私は魂が揺さぶられるようなものが書きたいと言い続けていた。私は小説雑誌を出している二社と契約をして原稿を送り続けているが、何を書くかということには常に苦勞している。編集者からの提案に助けられて続けていると、いつても過言ではなかつた。家内のロシア語の翻訳には、

何を書くかという悩みが無いからといつも羨ましがっていたものだ。

家内はそんな私に、自分が何かして書く材料を提
供してあげようかと冗談のようなことをよく言つて
いた。例えば、自分が浮気をしてあげようかと言つ
たこともあるし、私に浮気でもしてきたらと言ひ、
自分が怒り狂って出刃包丁でも振り回すことになつ
たら迫真のドラマが書けるのじゃないなどというの

もあつた。私を殺したらすごいのが書けるよねなどと言つたこともある。しかしいずれもその動機が小説のネタ作りというのでは、ニュースを見た人があきれよねということになつた。

私の中に諦めが広がり始めていた。私は自分が書く小説の中だけで生活しているような感じだつた。実生活では編集者との原稿のやり取りのほかは、自

炊している食材の買出しくらいしかしない生活であった。原稿のやり取りは、出版社が東京ということ、ほとんどは郵送かEメールですんでいた。私が、*メ*切に遅れない書き手だったこともあって、編集者とのやり取りも、*メ*切を過ぎた原稿を取りに来た編集者が隣の部屋で待っているときに、鉢巻を締めて必死で書いているというような場面は、私の場合一度もなかったのである。

そのころ連載物などを細々と書き送っていた東京の出版社から、刺激のある東京に出てきて本格的に書かないかという誘いがあった。多少は私の書くものを評価してくれている出版社だった。

私も、六十半ばだ。何かするとしたら最後の機会かもしれない。私は出版社の誘いを本気で考えてみようかと思ひ始めた。それにはこの田舎の家を処分してきれいさっぱり新天地でやり始めたい。

向かいの児島さんのご主人にこの家を売るとしたら買ってくれるような人がいるだろうかと相談してみた。この地域は、持ち家に住んでいる人がほとんどで、しかも人の出入りもない。児島さんは、街のようにはいかないかも知れないが国道筋の建材屋の親父さんが隣で不動産業をやっているから話してみたらどうかと教えてくれた。児島さんの言うには、おそらく街の不動産屋に話を持ち込んでも、この地

域の一軒家というとあまり本気で取り合ってくれないかも知れない。その点、小さくても地元の店なら、この地域の情報や人脈があるから案外いい話があるかも知れないというのだ。

翌日、遅い朝食をすませて、前日教えてもらった不動産屋にでも行ってみようかと思っていると、児島さんの奥さんがやって来た。そして家を売ってここから出て行くと聞いたが、とんでもないと強い調

子で反対する。私の妻が戻って来たときに家は人手に渡り、私は遠く東京に行ってしまったていたらどうするのだと泣かんばかりの勢いである。確かにそうだと私も思った。私の中に忍び込み始めていた諦めの気持ちを強く戒められたような気がした。私はその場で、家を売って東京に行くことは止めると、児島さんの奥さんに約束した。

雲ひとつ無い秋晴れの朝、私は妻がいなくなつてから初めて、ドライブしたい気持ちになつた。そうはいつても特に目的地も無いので、とりあえず山陰に出て日本海でも眺めることにした。山の木々はきれいだし、日本海の海の色もよかつた。だが妻とときどき出かけたドライブのような爽快さも満足感も無かつた。

日本海の岩がごつごつした海岸で車を降りて長い

時間水平線を眺めた。そのとき私はふいに、さる隣国による拉致事件のことを思い出した。たしか拉致被害者はこのような海岸付近から突然姿を消して、その後何十年も消息がなくなってしまったという。妻も、もし拉致されたのだったら突然何の消息もなくなってしまうということもあり得るなとぼんやり考えた。しかし、妻が姿を消したのは海岸近くでもないし、年齢的にも何かのために役立てたいとする

には年をとりすぎている。敢えて理由があるとしたら、ロシア語が出来ることくらいだろうか。それだつたら、件の隣国でも使えるかも知れないし、ほかにキリル文字を使うどこかの国の工作員が、妻の情報を得ていてある日拉致をしたということも想像できなないことはない。しかし、私には、妻が拉致されると言うのは現実的なこととは思えなかつた。

町内の人たちは、私と挨拶を交わすとき妻のこと

に触れなくなっていた。もう私のことを一人住まいの男寡と認識しだしているようだった。

ただ向かいの児島さんの奥さんだけは、最初からそうだったが、六年たった今も、妻は必ずどこかで無事生きているはずだから諦めないでと励まし続けてくれている。

七 妻の帰宅

ある新緑の美しい季節の夕方、私は窓から見えるイチョウの見事な新緑を眺めながら、パソコンの前に座っていた。実は昨日から一睡もせず、いままで書き続けていて、頭は朦朧としている。少しだけ寝ようかと考えていたが、実際には何となくぼんやりしたまま座っていた。

珍しくチャイムが鳴った。家内の失踪事件が膠着状態になってからは、回覧板や町内会費の徴収くらいしか訪問者は無かった。

玄関を開けると、さっぱりとした初夏の服装をした妻が、大きなキャリアバックを曳いて、満面の笑みで立っている。着ているものは散歩に出かけたときとは違おうが、妻の様子は六年前とまったく変っていない。

「おとうさん、ただいま」

妻は笑顔で言った。私は何が起こったのかわからなかった。妻は、ブーツと突っ立っている私に構わず家の中に上がってきた。私は一瞬、知らない人が家の中に上がり込んできたかのような錯覚にかられた。妻は居間に入ると、

「何も変っていないわね」

と部屋の中を見回しながら言った。そして、

「六年間どうしてたの」
と他人事のように私に聞くのだ。どつちの台詞だと
言いたい。

私はまだ一言も出せないでいた。妻は、ただ長期
の海外留学にでも行っていたように、久しぶりの帰
宅を喜び、当たり前のように平然としているが、私
の混乱はなかなか消えない。私は、妻の問いには答
えないで、

「拉致されていたのか」

と、先日のドライブのときの空想を思い出して聞いた。

「拉致ってなによ」

「あの日、散歩に出たまま突然いなくなったから、何か大変な事故か事件にあったのかも知れないと思つて、ずいぶん探したけど、結局何の手がかりも無いまま今日まで来たからね。拉致だったら、何の手

がかりも残さずに消えてしまおうというものだろう」

「私の行方不明事件で、何か小説が書けた？」

相変わらず妻はのんきな会話を続ける。

私が妻の会話の中に入らないので、

「通帳とか、パスポートとかが入っているとところ見
なかつたのね」

と、行方不明に関する話題に触れ始めた。

「通帳やパスポートを持って散歩に出かけたという

のか？」

「まあ、事情はゆっくり話しますからね。怒らないで聞いて欲しいのだけど、実は私ウクライナに行っていたの。前から一度留学したいって言ってたですよ。それにあなたは外国には行きたくないって言うていたし」

「それが家の前の散歩と何の関係があるのかね」

「まあ、ゆっくり説明するから、今はまずシャワー

させて。話はそれからね」

そう言つて妻は、六年間空けたことのない妻のたんの引き出しから着替えを出して、さつさと風呂場に行つてしまつた。その様子はまるで散歩から帰つてきて、シャワーに行くのと同じであつた。

妻のシャワーがすむのを待っている間に私は眠り込んでしまつた。

目が覚めると外は雨が降っていた。この六年間そうであつたように、私一人の朝だつた。

それにしても昨夜の妻が帰つてきた夢は、はつきりしていたなと思う。これまでも妻が帰つてきたかのような夢を見ることはあつたが、それはいつも帰つてきたのか、そうでないのかはつきりしない掴みどころがない夢だつた。

私は、妻が帰つてきたのは本当なのではないかと、

部屋の中を見回した。どうもそれらしい様子はない。

そう言えば、

「もう起きたら」

という妻の声で目が覚めたような気がするが、そこに妻はいなかった。

ところがシャワーを使っているような音がする。

誰もいないはずの家の中で、人がいるような音がするのには不気味だ。私はおそるおそる浴室の方に近づ

いた。確かに誰かがシャワーを使っている。私は怖くなくて浴室の戸は開けずに、浴室の前の廊下にしばらく立ちどまつて中の音に耳を済ませていた。やがて水の音が止まり、シャワーを使っていた誰かが更衣室に出てきた音がする。私は思わず居間の方に逃げかかった。しかし、泥棒だったらせつかく忍び込んだ家でシャワーは使わないだろう。とりあえず居間に戻って待つてみることにした。

待つほどもなく、妻が頭をバスタオルで拭きながら居間に入ってきた。

「びつくりしたでしょう」

と言いながらニコニコしている。

「いまごろ玄関に鍵かけないことにしているの？」
妻がそう言ったが、私には何のことかわからない。

私はいまでも大抵は鍵をかけているし、特に夜寝るときは必ず鍵をかけるようにしているつもりだ。狐

につままれた、とはこのことである。

前の日に見た妻の夢は、現実だったのか、それとも直前の正夢だったのかさえはつきりしない。

「さつき帰ってきたんだけど、声かけても返事がないので玄関押したら鍵かかってなかったから勝手に勝手に入ってきたの。あなたはそこに毛布一枚かぶってぐっすり眠っていたわ。すぐには起きそうになかったから。先にシャワー使ったの」

私は、夢と現実が混乱してしまっている。突然帰ってきた妻を私は玄関で迎えた。そして先にシャワーを使いたいと言う妻のシャワーを待つ間に眠ってしまったような気がする。徹夜明けで寝込んだときに、妻が帰ってきた夢を見て、寝ぼけて玄関を開けたが、そのまままた寝てしまったのだろうか。

妻は声をかけたのに誰も出ないから、勝手に入ってきて、私が眠り込んでいたのでシャワーを使った

と言う。そのあたりのことがどうもはつきりしない。

八 妻が話したこと

妻は、ウクライナかロシアへの留学を実現させた
いと早くから自分の中で暖めていたそうだ。そのた
めの費用もある程度溜まっていたという。私に、一

緒に行かないかと言ったこともあるが、私がいっこうにその気を示さないので、行くとしても一人で行くしかないと考え始めたそうだ。そして行く先や向こうでの勉強の方法などを詳しく調べたようだ。

そこまでは、私も何となく知っている。ところが妻は、そのことと私に対する何らかのサプライズを組み合わせようとしたのである。それが、突然の行方不明を装うということだったというのである。

それには協力者がいたのである。向かいの児島さんの奥さんである。彼女は事情を知っていたので、何があつても、何年たつても私には、妻は絶対にどこかで元気にしているはずだからと励まし続けることが出来たのだ。考えてみると何も知らなかったらそこまでは言えなかつただろう。それにしても口が堅い人だ。

あのとときの警察による大搜索は、狂言失踪に警察

を協力させたことになる。ただではすまないのではないか。

妻はウクライナに行っていたそうだ。六年間も何の連絡も無しにである。しかも家の前の散歩の途中に突然、準備も何も無しに。それには妻の突飛な、あまりにも突飛な計画があつたのだ。長年連れ添つた妻が、そんな思い切つたことをするとはとても想像できない。私には信じられないような話であつた。

妻は十五年くらい前からウクライナに通訳の仕事で時々行っていた。行くときは一週間とか二週間滞在するのが普通だった。あるチェルノブイリ救援グループの仕事に通訳として協力していたのだ。ところが八年くらい前だったろうか、体調を崩したのをきっかけに行かなくなっていた。

失踪の半年くらい前から、そのグループから再び同行して欲しいとの誘いが盛んに妻の下に来ていた

ようだ。そのことは私も知っていた。それに対して妻はしばらくロシア語を使っていないからと言つて断っていた。しかし、事情をよく知っていてしかも医療の専門の場で通訳できる人はなかなかいないよ
うで、誘いは執拗に続いていたという。

その誘いのなかで、

「御主人も外国旅行をかねてご一緒にどうですか」と言われたことがあるらしい。そのころだったのだ、

妻が私にしきりに外国に行かないかと誘いかけてきたのは。私は海外旅行には興味が無いと言つて、その話にはまったく乗らなかつたが妻へのウクライナ行きの誘いは続き、断りきれない状態になつていたのでそうだ。そして結局引き受けることにしたのだが、それに妻はひとつの条件をつけた。その条件と
いうのが、冗談としか思えないようなものだつた。

妻は、私に非日常的な事件を体験させようと綿密

な計画を練ったのであつた。つまり自分がある日突然前触れもなく夫の前から姿を消すという設定の演出に協力してくれるよう依頼者を説得して了解させたのだつた。

その日妻は、パスポートと自分の貯金通帳とそのキャッシュカードだけを持って、まったく普段の散歩のような格好で家を出たのであつた。しかもいつものコースを歩いているところを誰かに見られるよ

うに、実際に何往復もする時間まで計算に入れていたのである。現に、私は妻が歩いている姿を、下の方に消えていくうしろ姿だけであつたが見たのである。吉田さんも歩いている姿を見たと言つていた。

私が見たときが往復の最後だつたのかどうかはわからないが、妻は国道に出てすぐのところにあるバス停で、打ち合わせどおり迎えに来ていた依頼者の車に乗り込んで立ち去つたのであつた。迎えの乗用

車に乗り込むところを誰にも見られないように気をつけたそうだ。

途中スーパーに寄って、とりあえず新幹線で東京まで行くのにおかしくない服装を整え、

そのまま広島駅から新幹線に乗った。東京では依頼者の自宅に泊まって、ウクライナ行きに必要な衣類から辞書まですべてのものを整えた。その費用は自分の金を通帳から引き出して使ったのだそうだ。

依頼者の自宅から、妻は向かいの児島さんの奥さんに電話して、自分の一世一代の大芝居を説明し理解してもらった、現地から時々連絡を入れるから状況だけは把握しておいてくれるよう頼んだ。この演出は、夫の執筆のための重要なものだから、夫がどんなに自分の搜索に苦勞しても、絶対に夫には内緒にするように固く約束してもらったのだった。かねてから夫の作品の愛読者であつた上に、何にでも好

奇心の強い児島さんの奥さんは、喜んでこの妻の壮大な計画に参加したのだった。

妻からの電話連絡の時には、児島さんの奥さんが電話を取ったとき以外は間違い電話か、セールス電話を装って話をしないようにするなど、計画は周到であつた。

妻も児島さんの奥さんも初めはこれが六年間も続くとは思っていなかったようだが、成り行きを知つ

ている児島さんに戸惑いはなかった。しかし、その間児島家にはいろいろなことが起こっていた。おじいさんが亡くなり、長女が結婚した。

彼女は、失踪当日からしばらくの搜索劇も、白い獣事件のときも、白骨死体発見のときも、俱知安行きのときも、そ知らぬ顔で心配そうなようすを装って私を励ましたのだった。私はそのような児島さんの奥さんのようすに何の疑問も持たなかった。奥さ

んは家族にも一切喋らなかつたのだらう。

妻はウクライナで、チエルノブイリ救援グループの現地訪問の際の通訳をしながら、そのグループの再訪までの間、キエフの大学で興味のある講座を受講して勉強をしていたのである。

現地ではそれまでのたびたびの訪問で出来た知り合いが何人もいて、それらの人たちとの交流があり、結構楽しい留学生活を送つたのださうだ。現地の知

り合いの中には、チェロの勉強をしながら通訳のアルバイトをしているという日本からの若い女性もいて、多少バイオリンを弾く妻はその女性の音楽仲間たちの中に入って合奏を楽しんだりまでしていたという。

ちなみに私はチェロを弾いていたので、作家として収入を得るようになり忙しくてチェロの練習ができなくなるまでは、妻と私は大学時代からの音楽仲

間たちと音楽で遊んでいたのだ。

とにかく妻は向こうで充実した生活を送っていたようだ。しかも兎島さんの奥さんを通じて、私の安否情報は確認できているので、何の心配もなく自分のやりたいことをしていたということである。

九　その後

いずれにしても私にとっては六年以上行方不明だった妻が元気に帰ってきたのだから、めでたしめでたしというところだが、もちろんそう簡単にお手打ちというわけには行かない。特に失踪当初は町内の皆さんに大変な迷惑と心配をかけているのだ。テレビだったら記者会見の席で立ち上がって

「大変ご迷惑と、ご心配をおかけしました。申しわけありませんでした」
と言つて深々とお辞儀をするところだ。

実際に私は町内会の席上で無事帰つてきたことを謝罪しなければならぬと考へている。しかしどのようによ明すればいいのか悩んだ。私たち夫婦だけでなく、児島さんの奥さんの立場も微妙である。私たちは彼女と三人で秘密会議をした。

私たち三人は町内会の皆さんに対しては共犯者である。いや、私は被害者であるともいえるが、やはり外部の皆さんに対しては私も同罪であろう。考えてみると町内会だけでなく、大掛かりな捜索をしてくれた警察やこの街の駐在、倶知安でお世話になった警察に対しても嘘をついたことになる。受け取った旅費なども返さなくてはならないかも知れない。

秘密会議では、児島さんの奥さんは何も関与しな

かつたことにして、妻はよくある蒸発をしたということにするのはどうかという意見に傾いていった。

妻はなぜ蒸発したのかということになるし、妻一人に罪をかぶせる形になる。実際に妻一人で思いついた行動だからそれは仕方ないのではないか。

失踪当日の妻の行動をどう説明するのかも難しい。妻に通訳を依頼した関係者も、妻の狂言失踪に手を貸している。しかし、その人たちを巻き込んだりし

たかない。

この時点で私たち三人、というより私と妻の二人は、町内の人たちには、

「そうだったのか、帰ってきて良かったね」と納得してもらえる説明をして、酒二升くらいを差し入れて頭を下げればすむと思っていた。なにしろ六年以上前の話である。警察の方も菓子箱を持って帰って来たことを報告すればすむと思つた。

ところが、町内会での謝罪もすまないうちに、というより秘密会議の方針も最終的に固まらないうちにあるテレビ局が取材に来たのである。取材の記者は、ただ行方不明だった家庭の主婦が無事見つかったということではなく、初めから主婦の狂言失踪と、いうことで取材しようとしているのだ。どこでその情報を手に入れたのだらう。妻も、児島さんの奥さんもちろんマスコミに漏らすようなことはしてい

ない。

私は、記者に情報源はどこかをしつこく聞いたが、彼は絶対に言えないという。そして妻にずけずけと夫を騙して姿を消した理由や手口を聞き始めた。私はあわてて制止した。妻にも何も話すなと強く言つた。さらに記者は、妻が密かに連絡を取っていたという近所の奥さんの家は何処かとまで聞く。もちろん教えなかつた。とにかくその姿勢は強引である。

カメラマンも同行していたが、撮影してもいいかと聞かれたとき、拒否したらさすがに目の前では撮影はしなかった。

取材班にはもう一人女性のスタッフがいたらしく、玄関で記者を呼ぶ女の声がした。記者は、

「ちよつと失礼」

と言つて、玄関に出てその女性と小声で話していたが、カメラマンを呼んで我が家から出て行つた。強

引に妻から話を聞きだそうとした矢先なのに、それを放り出して出て行くというのも失礼な話である。話すつもりは無かったので、好都合ではあったが、何処に行ってしまったのだらう。取材を中止するこ
とになったのだらうか。

彼らが我が家から出て行ったあと窓から見ると、何と向かいの家の玄関先で記者が兎島さんの奥さんにマイクを向けている。カメラマンがカメラまで構

えているではないか。児島さんの奥さんは取材に対して、なにか話しをしたのだろうか。そもそもどうやって児島さんの奥さんが関係者であることを嗅ぎだしたのか。

今私が出て行って、児島さんの奥さんに

「何も言うな」

などと言ったらかえっておかしいと思われる。困ったことになった。このままだとワイドショーなどで

面白おかしく、しかも視聴者の興味を逸らさないように大げさに狂言失踪が報道され、すべてのことがあからさまにされてしまふだろう。挙句の果てに、妻が夫の小説のネタを作るために、近所の主婦を密かに巻き込んで六年以上も、夫とさらには近所の人たちや警察までを騙し続けたことを話題にし、コメントイターがあれこれと勝手なことを喋るのだらう。それには数年前に全国ニュースで報道された白い獣

の映像も引つ張り出してきて、妻のことを心配する私の姿が写った場面を見つけて出して繰り返し映し出すだろう。もしかしたら一緒になつて心配顔をしてゐる児島さんの奥さんの姿も、映像のどこかから見つけ出すかもしれない。

取材の人たちは、もう一度我が家に来ることはなかつた。彼らが帰って行つたあと、児島さんの奥さんがやって来た。

「いろいろ聞かれたわ。あの人たち何処で調べたのか随分詳しく知っているみたいだったけど、わたしが放送しないで欲しいと言ったら、そのことも含めて社内によく検討するって言って帰って行ったわ。雰囲氣的には放送しないみたいだった。私たちが困るからとかじゃなくて、ネタとしてそれほど面白くないと思ったんじゃないかしら」

そして、

「テレビに出られるとは思ったけど、地域の人たちを騙した役回りじゃ悪者ということでしょ」

「ごめんなさいね。変なことに巻き込んでしまった」「いいのよ。結構緊張感あったし。それにいろいろ身近で事件があっても安心して見ていられたし。こう言っては悪いけど、町内の人たちだって、それなりに心配してくれたけど、どの事件のときも奥さんが被害者という具体的な状況にはなっていないかった

しね。あのテレビが放送されて、あることないこと
言われて、わたしたちが世間を騒がせた悪者にされ
たりしない限り大丈夫よ」

児島さんの奥さんは、放送はボツになると決め込
んでいるようだ。もちろん私たちもそうなつて欲し
い。そうすれば、取材が来る前に打ち合わせていた
ように、児島さんの奥さんと妻は連絡しあっていたな
かったことにして、妻はある事情で蒸発していたこ

とにすれば一件落着する。あとは、妻の蒸発の理由を考えればよい。

妻は考えていたが、

「そうね。私が悪者になることでいきましょう。通訳を断りきれなくなっていたし、私自身むこうで勉強するチャンスと思つて行きたかつたのだけど、あなたと一緒に行つたらという依頼者からの折角の申し出を断つて、絶対に行かないつて言うし。それで

私が一芝居打ったつていうことにするわ。実際その通りだから。皆さんに大変なご心配をかけて、搜索までしてもらったことは本当に申し訳なかつたと言つて、頭を下げることにします。主人とは、そのことで喧嘩して、『じゃあ、勝手にします』と言つて出て行ったことにします。実際には喧嘩して出て行ったのじゃなくて、何も言わずに出て行ったのだけど」

そして、児島さんの奥さんに向かつて、

「だから、奥さんは絶対に何も関係なかったってことを通すのよ」

と言うと、児島さんの奥さんも、

「大丈夫よ。六年間誰にも気付かれなかったのだから。今度の町内会さえ乗りきればいいのよね」

「ありがとう。本当にありがとうね。奥さんのおかげで何の心配もなく向こうでの六年間が過ごせた

わ」

「最大の犠牲者は僕だよ。身内が、何の前触れもなく突然行方不明になったときの僕の気持ちをどう思っているの。本当に心配したよ。ただ途中から奥さんの励ましてくる様子が何となく変だなと感じ始めたけどね」

「奥さんからは、絶対にご主人には気付かれないよ。うにつてきつく言われていたけど、実はわたしとし

ては、ご主人には私が『心配ない』と言ってるのは本当だからと、気付いてもらいたいと願っていたのよ」

「気付いたとまでは言えないけど、あまりにも兎島さんの言葉が確信に満ちていたからね。もしかしたら何か知っているのかも知れないと思うようになったね。でもそれを言わないのは何か事情があるともね」

「ご主人に問い詰められたりしなかつたから助かつたわ」

「もう主人もみんなも諦めて私が何処かで野たれ死んでいると思ひ始めたらしいときに、奥さんだけが変わらず主人を励まし続けてくれたということね。奥さんにはいくら感謝しても足りないわね。それどころか奥さんと主人が変なことにならないかと心配したくらいだわ」

「そうよ、もう一年続いてたら変なことになったかもね」

児島さんの奥さんはそう言つて楽しそうに笑つた。

(了)

*この物語はすべてフィクションであり、登場する人物その他はすべて架空のものです。

編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前についで

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットのあゝ風景

「オセロ」の手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

妻が消えた

2022年10月10日初版発行

著者：山中與隆

編集：山中伶子

表紙素材元：

www.pakutaso.com

・秘境への入り口の写真素材

ID番号：72850

撮影者：横浜桜

www.photo-ac.com

・タイトル：スポーツウェアの女性

作者：FineGraphicsさん

写真のID：2723225

・タイトル：オオカミ4

作者：acworksさん

写真のID：57204

©Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>
